

はじめに：大衆独裁と合意形成

第二回『大衆独裁』国際会議（ソウル 漢陽大学）の報告

岩崎 稔

本誌第六号で紹介したように、東京外国語大学海外事情研究所は、漢陽大学の比較史比較文化研究所(Rich = Research Institute of Comparative History and Culture)を中心とする内外の五つの研究所とのあいだで、ファシズムや政治的専制に関する概念理解の深化のための国際的な協働を続けてきている。昨年「強制と合意」を主題とした第一回会議には、本研究所員の中野敏男教授、篠原琢助教授が派遣され、さらに千葉大学の小沢弘明教授もそれに参加して、日本側からの問題提起を行った。その詳細については、前号を参照していただきたい。第二回会議は、2004年10月29日から31日まで、韓国研究財団、フランス大使館の後援もうけて、ソウルの漢陽大学で開催された。今年は所員である岩崎稔助教授が、総括討議のコーディネーターとして派遣された。

全体のセッションは、第一日目の「政治宗教」、第二日目の「英雄崇拜とメディア表象」、第三日目の「レイシズム、ナショナリズム、反ユダヤ主義」に分かれ、最後にラウンドテーブルを通して総括す

るという形で進行した。共通言語は英語とした。冒頭で、このプロジェクトの牽引車ともいうべき役割を担ってきている林志弦が会議の課題を設定した。かれは、第一回の会議の成果を踏まえて、三つのセッションで掲げる主題を切り口とすることで、「強制」と「合意」のような政治的概念の脱構築と多元化をめざすと宣言したのである。

残念ながら一日目は、ナショナリズム研究で著名なローマ大学の Emilio Gentile と、朝鮮現代史の少壮として注目されているコロンビア大学の Charles Armstrong が、個人的事情の変化によって突然参加できなくなり、報告だけを寄せるという形になったが、それぞれに代読者が立った。Emilio Gentile は、「民主主義体制と全体主義体制における政治の神聖化」でかなり概括的な政治思想史的サーヴェイを提供した。とくにこのセッションにおける「政治宗教」という概念の共通準拠点は、エリック・フーゲリンの政治思想であったようにみえる。Martin Sabrow は、「時間と正統性」という報告でナチ体制

と東ドイツの独裁における時間意識を手がかりとした比較を試みた。ワルシャワ大学の Marcin Kula は、戦後ポーランドにおける宗教の機能を、パリ第十大学の Didier Musiedlak は、ムッソリーニの思想におけるそれをそれぞれとりあげて論じた。アジアに関しては、Inho Na と Jinwoo Park とが大日本帝国とナチスドイツを比較して、そこにおける政治的宗教を問題にし、また Charles Armstrong は、北朝鮮における家族主義表象との関係における政治宗教という観点を提出した。

第二日目は、Jinil Lee がかなり一般的な枠組みとして、とくにヨーロッパ近現代史における英雄像の構築を論じ、ウェールズ大学の Peter Lambert は第三帝国のケースを、Won Yong Park はソヴィエト・ロシアにおけるスタハーノフ運動を、グラモルガン大学の Linas Eriksonas はポルトガルとリトアニアのケースを、ソウル大の Michael Kim は植民地体制下の朝鮮を、それぞれ個別ケースとして紹介した。漢陽大の Chonghoon Lee とボツダム現代史研究センターの Christoph Classen は、英雄表象の問題に特化してそれぞれ立論し、スターリン主義のもとでのメディアの機能を検討した。

三日目には、酒井直樹が 9.11 後のアメリカ社会をファシズムという術語を用

いつつ解明しようとした。また、ハンブルク社会研究所の Michael Wildt は、ナチ体制を支えた世代のデモグラフィックな研究の成果を提示した。他に、パリの国立科学研究センターの Annette Wieviorka はヴィシー体制下のフランスにおける反ユダヤ主義を、Volodymyr Kravchenko は、ソヴィエト体制下でのウクライナにおける反ユダヤ主義をそれぞれ解明した。とくに興味深かったのは、ワルシャワのユダヤ歴史研究所の Feliks Tych の報告である。かれは、戦後ポーランドにおける社会主義体制のなかで、本来ならばマルクス主義者とは背反するはずの反ユダヤ主義がいかにかに人的、思想的に浸透し保存されたのか、その必然性は何だったのかを説得的に論じた。

ラウンドテーブルを含め、討議の全体をふりかえると、三日間の諸報告が実に広範な対象を扱ってきたという豊穡さのためか、いささか雑多な論点に拡散気味であったが、とくに特徴的であったのは、ある局面で、酒井直樹による問題提起に対するヨーロッパ史の研究者からの反発が生まれたこと、またその反発の含意を再帰的に問い直す場面があったことだ。酒井に向かって、一からファシズム概念の定義を講義するかのように振舞う歴史学者が現れるなど、かれの問題提起のア

クチュアリティは、どちらかというと学問的ルーティンのなかに回収されかかってしまった。ある意味で、日米の学界において、酒井のスリリングな問いかけをめぐってこれまで目撃されてきた反応を、ヨーロッパの研究者がここソウルでも反復したという光景であった。合意の独裁という挑発的な問題の立て方にしても、一方では非常に多様な素材をつき合わせて新しい対話がはじめられるという面をもちながら、なおも他方で、それすらも既存の研究の新しい一ブランチとして消化されてしまう傾向をまぬがれない、ということなのかもしれない。

本誌では、会議の議論の一端を共有するために、Michael Wildt、Feliks Tych、そして酒井直樹の報告を以下に掲載する。

(いわさき みのる・東京外国語大学)